

ヤスパースと仏教

湯 田 豊

序 論

キエルケゴールとニーチェによつてまかれた種子を育て、初めてそれを実存主義として結実させたのは、ドイツの哲学者カール・ヤスパース(Karl Jaspers, 一八八三—一九六九)である。ヤスパース自身は自己の哲学を実存哲学(*Existenzphilosophie*)と称し、アカデミツクな哲学ではなく、人間の实存(*Existenz*)に根差した生き方を求めた。ヤスパースの実存哲学の最初の衝動は、単なる学説に対する不満であつた。真正の「哲学すること」(*Philosophieren*)は、個人の实存から泉のように湧き出なければならぬ——ヤスパースは、このように確信した。

ヤスパースは精神医学者として出発したが、心理学に飽き足らなくなり、やがて哲学研究の道を歩むことになった。ヤスパースは自己の著述について、次のように述べている——「今まで三度、わたくしは体系的な著作を企てた。すなわ

ち、わたくしの《一般精神病理学》(一九二三)、わたくしの《世界観の心理学》(一九一九)、わたくしの《哲学》(一九三二)が、それである」と。『哲学』は、「世界定位」、「実存解明」、および「形而上学」の三つから成る三部作であり、ヤスパースの実存哲学を代表する作品として知られている。

しかし、ヤスパースは彼自身の一生を完結させる労作として、『哲学的論理学』および『普遍哲学史』の二つを挙げた。『哲学的論理学』に属する仕事としては、『理性と実存』(一九三五)および『実存哲学』(一九三八)があり、『普遍哲学史』を代表する労作としては『偉大な哲学者たち』(*Die grossen Philosophen*, 二巻)がある。『偉大な哲学者たち』(第一巻、一九五七)のなかには、「ブツダ」(一二七—一五四ページ)と「ナーガールジュナ」(九三四—九五六ページ)が含まれている。「ナーガールジュナ」については、すでに他のところで詳論したので、ここでは「ブツダ」に焦点を合わせ、ヤスパースと仏教についてささやかな論述を試みたい。

I ヤスパースの位置づけ

「ブッダ」および「ナーガールジュナ」に顕著な特徴の一つは、ヤスパースがインドの二大思想家に関して、他の仏教学者の言ったことを要約し、それについてリポートしているという事実である。ある時には、彼は他人の言ったことを別のことで表現し、ある時には、他人の説ないし翻訳を直接引用し、綿密な論証をしないで判断を下している。日本流に言えば、ヤスパースの「ブッダ」と「ナーガールジュナ」は糊と鉄で作られたエッセイである。この点に関して、今はなきアメリカの哲学者ウォルター・カウフマンは、次のように述べている——「彼はフアイル用のカードに一つ一つの文章をコピーし、それからこれらの抜粋をめぐって自己の書物とエッセイを作ったかの如くである。（ヤスパースの）ある以前の学生は、今でもなお賞讃に満ち、これがまさしく彼の行なうことであることを確認する」と。ブッダの真意を確かめ、正確な内容を読者に伝えることに、ヤスパースはまったく関心を示さない。彼にとって、仏教の内容そのものは第二義的な事柄であった。

ヤスパースは哲学を廃棄し、その代わりに「哲学すること」を彼の実存哲学の原点に据えた。このことは、彼が一切の内容を否認して人間の内なる資質に訴えたことを意味する

（「ブッダ」、一三二ページ参照）。理性が挫折した時に初めて人は真に「哲学すること」を行なう用意がある——このようにヤスパースは言う。別言すれば、哲学することは、哲学的信仰を抱くことと同じである。ヤスパースの眼から見れば、知識ないし科学的真理への欲求はタブーである。すべての知識は廃棄されねばならず、最後に残るのは信仰——ヤスパース流に言えば哲学的信仰——だけである。

それでは、人は何について「哲学的信仰」を抱くのか？ ヤスパースによれば、それは超越（*Transzendenz*）である。「しかし、それにもかかわらず、すべての哲学することは、超越を確認するという目標へ向けられている」——このようにヤスパースは言う。ここで明らかなことは、ヤスパースの実存哲学が本質的にカント的であるということである。一方においては経験可能な現象界があり、他方にはその彼岸に他の世界（＝超越）がある。そして後者は認識不可能である、というカントの認識論の上にヤスパースは立っている。ヤスパースの仏教観がカント的に解釈されたものであることを、われわれは知るべきである。

II ブッダにおける知識と救済

ブッダの教えと瞑想に関して、ヤスパースは次のように述べている——「ブッダの教えは、洞察による解放を意味する。

正しい知識はそのようなものとしてすでに救済である」(一三二ページ)、と。さらに彼は「ブッダは認識体系ではなく、ある救済の道を教える」(一三三ページ)とも言う。ブッダの洞察に関し、ヤスパースは次のように言う——「それは厭世的な気分ではなく、すべてを包括する苦に対する認識論的な一瞥である。この一瞥そのものは、より明るい心的状態において行なわれる。なぜなら、知識において解放が生じるから」(一三七ページ)、と。

ブッダの教えに関して、確かにヤスパースは知識を重視する。しかし、このことから直ちに、われわれはヤスパースが知識を高く評価していると速断すべきではない。カントと同じく、ヤスパースも厳密な意味での知識は現象界の事物に局限されることを容認する(例えば、一三三、一三六、一四八、一四九ページ参照)。ヤスパースは、実質的にはブッダの教えにおいて知識そのものが果たす役割を高く評価しないのである。知識は人生の究極の問題に対して答えるのを拒否する、というのがヤスパースの基本的な態度である。

ヤスパースにとって、ブッダの洞察、すなわち、知識は哲学的信仰である(一四九ページ参照)。それが哲学的信仰である以上、初期仏教徒は絶対他者、あるいは同じことだが、超越に対して「哲学的信仰」を抱いていたということになる。根源的な哲学、すなわち、ブッダの教えのなかで何が残るか

ヤスパースと仏教(湯田)

と自問し、ヤスパースは次のように答えている——「それは自己献身の不思議な力であり、永遠なるもの(*das Ewige*)のなかへ吹き消されることである」(一五二ページ)、と。永遠なるもののなかへ吹き消されるというのは、もちろん、涅槃に入ることを意味する。ヤスパースが涅槃を絶対他者あるいは超越として理解していることは否定出来ない。

ヤスパースによれば、ブッダの救済は知識に求められる。そして彼は救済の道として縁起を示唆する。彼によれば、仏教の唯一の救済は「知識において無知を廃棄すること」(一三七ページ)である。縁起に関連して、ヤスパースは次のように言う——「この救済は事物への執着から解放され、すべての無益な食欲から離脱する点に横たわっている。それは、この全人間存在の状態、由来、および廃棄を洞察するためである。盲目性、有限なものに捉われている状態、執着がその起源であり、完成された知識がこの人間存在を廃棄する」(同上)、と。そしてヤスパースは重ねて、人間存在が「知識においてのみ、知識とともにのみ止む」(一三八ページ)と述べている。

しかしながら、たといヤスパースがブッダの救済の道の信仰はひとつの知識である(一四六ページ)と述べたとしても、この知識は決して知識一般ではない。「知識において無知を廃棄すること」が意図されたとしても、この無知は決して知

識の欠如ではなく、四つの貴い真理を理解しないことであり、それらを認識しないことである（例えば、サンユッタ・ニカーヤ、Ⅱ・４参照）。輪廻を廃棄させるものは、欲望の絶滅と四つの貴い真理に対する無知・無理解の消滅の二つである。しかるに、ヤスパースは無知を仏教の公式に対する無理解として捉えていないように思われる。

Ⅲ 自我の否定と肯定

カントにならい、ヤスパースは現象界と超越を鋭く区別し、次のように説明する——「なぜなら、人間は自己自身から把握され得ず、人間存在を思い浮かべる際に、それによって人間が存在するところの他者が示されるからである」と。ヤスパースによれば、人間は自己自身だけで存在することが出来ず、超越を必要とする。それゆえ、彼は「そして、わたくし自身がそうであるもの、それは超越に対するわたくしの根源的な関係に基礎づけられている」と断言した。結局、ヤスパースの超越は、人間存在の外にあり、しかも人間がそれによって基礎づけられている絶対他者、神にほかならない（『哲学入門』、一九五〇年、八三ページ参照）。そして、ヤスパースは、人がこの超越（Ⅱ神）に向かって跳躍することを要求する。このことは、実質的には人がこの神を信じ、この神の呼び掛けに応じてこの神に祈ることを意味する。ヤスパース

が「『哲学的信仰』を説く所以である。『純粹理性批判』（A 87）のなかで、カントは卒直に「わたくしは堅く神を信じる」と告白し、さらに「わたくしは神と来世の存在を不可避免的に信じ、この信仰を何ものも揺るがすことが出来ないことは確実である……」（A 89）と言った。カントとヤスパースに共通しているのは、確実なものへの信仰である。彼らにとって、論理的証明は不要であった。

今や、われわれはヤスパースが仏教における自我についてどのような説明をしたかを検討しよう。まず最初に、彼は「ブッダの答えは驚くべきである。彼は、自我を否定する」（一三九ページ）と言う。しかし、カントの認識論を信奉するヤスパースが超越に対して「哲学的信仰」を抱いていることは、すでに見た通りである。当然、ヤスパースはブッダの無我説を否定せざるを得ない。それゆえ、ヤスパースは次のように言う——「ブッダはその場合自己を否定していない。しかし彼は、どのようにしてすべての思考が本来の自己にまで迫らないかを示す……けれども、ここでは自我でないものが本来の自己の尺度で考えられる。この自我に対する問いは、未解決のままである。しかし、本来の自己が存在するところのそこへ方向は示されている。それは、そのようなものとして直接には考えられないが、それは涅槃と符合するに違いない」（一三九ページ）、と。そして、ヤスパースは「な

ぜなら、生成と自我性の見せかけの流れの根底には何も存在しない」(一四〇ページ)と言いながら、その直後に次のように付け加えることを忘れない——「しかし、その二つは、人を欺くこの生成と自我性の内部に横たわっている一切の思考形式がもはや通用しない、まったく、他者のなかに廃棄されるべきである。そこでは、存在も非存在(無)も通用しない。これは、すでに悟られている認識に対して示され、涅槃において達成される」(同上、傍点、筆者)、と。

ヤスパースの自我観は、カントのそれである。ブッダ自身は反形而上学的であった。彼は現象界の背後に存在すると想定されるウパニシャッドの自我(アトマン)を終局的に否定した。超越ないし絶対他者に対する問いは、初期仏教に関する限り、まったく無意味であった。さらにまた、ヤスパースは超越を永遠なるものとして理解し、これを涅槃と直結させたけれども、涅槃は自我としてではなく心理学的な次元として解釈されるべきである。涅槃は、人を再生へ駆り立てる渴きの消滅した状態である(ディイガー・ニカーヤ、14・3・1参照)。しかるに、ヤスパースは涅槃において超越が達成されると考えた。ヤスパースの自我観にとって決定的に不利な証言を、われわれはある、パトリ語の聖典(8)のなかに見いだすことが出来る。そこには、次のように述べられている——「そしてまた涅槃は自我のない概念である。これは確実である」、と。

ヤスパースと仏教(湯田)

現象界と究極的実在という二つの世界、二つの真理を説くカントの認識論は、すでにウパニシャッドのなかにも見いだされる。しかし、このような思考方法の克服が初期仏教の出発点であった。ヤスパースのブッダ観は、インド思想史におけるブッダのこのユニークな発見を全面的に否定するものである、と言わざるを得ない。超越という思想はカント哲学の中核ではあっても、ブッダの教えとは無縁である。(9)

結 論

ヤスパースによれば、西洋人の仏教理解には限界がある(一五三ページ)。「われわれは真剣に途方もない距離を見てとり、安っぽい、急ぎの接近を拒まねばならない。ブッダの真理に対する本質的な関与を得るためには、われわれが現にあるところのあり方を止めねばならないであろう」(同上)——このようにヤスパースは言う。(10)しかるに、ヤスパースは、彼自身のあり方を変えようとはしない。彼はカントの遺産を忠実に継承し、飽くまで超越という名の神に固執する。アジアと西洋の間に隔たりがあるとしても、この距離を埋めることは可能である——このようにヤスパースは考える。「永遠の真中に共通に関連させられているという要求は止まないから」(二五四ページ)、とヤスパースは言う。平易に表現すれば、アジアと西洋は共に超越を人間存在の唯一の根拠として認め

ねばならないことになる。

結局、ヤスパースは仏教をインド人のエトスに即して歴史的に理解しようとしたのではない。彼は仏教を素材にして、彼自身の『哲学すること』を企てたのである。「ブッダ」のなかにわれわれが聞くのは、決してブッダの肉声ではなく、ヤスパース自身の声である。そして、わたくしはヤスパースの背後にカントの巨大な影を感じる。

- 1 *Über meine Philosophie (Rechtschraft und Ausblick, 1951), p. 426.*「わたくしの哲学について」というエッセイが初めて出版されたのは一九四一年。このエッセイは、ヤスパースの哲学に対する最良の手引きである。

- 2 神奈川大学「人文学研究所報」(No.16、一九八二年)に収められているわたくしの論文、「ヤスパースとナーガールジュナ」参照。

- 3 *From Shakespeare to Existentialism, 1959, p. 317.*

- 4 *Über meine Philosophie, p. 422.*

- 5 *Über meine Philosophie, p. 404.*

- 6 *Über meine Philosophie, p. 421.*

- 7 *Über meine Philosophie, p. 424.*

- 8 ヴィナイヤピタカ・パリヴァーラ、3・1、ヴィナイヤピタカ、V・八六ページ。

- 9 「わたくしの哲学について」(四〇六—四〇七ページ)のなかで、ヤスパースは超越について次のように述べている——「超

越だけが真実の存在である。神が存在するということだけで充分である……人間は顧慮に値しない」と。唯一の神に対する信仰の欠如が初期仏教の最大の特徴の一つであることは、周知の事実に属する。

- 10 ヤスパースはヨーロッパ人であることを止めるには及ばない。しかし同時にまた、ブッダをヨーロッパ人に変えることは出来ない。しかるに、ヤスパースはブッダをカント的に解釈し直した。それゆえ、わたくしはヤスパースがブッダに対して同情的であるという評価には賛成しない。ヤスパースはブッダの教えを真剣に考察することを拒否したと言えよう。彼はブッダをヤスパース自身の『哲学すること』へ手引きするための手段あるいは材料として利用したのである。それゆえ、われわれは彼の「ブッダ」および「ナーガールジュナ」のなかに、仏教の真の精神を見いだすことを期待すべきではない。

(神奈川大学教授)